

## 王であるキリスト

(ダニエル 7:13-14、黙示録 1:5-8、ヨハネ 18:33b-37)

2012年11月25日

イエズス会司祭 小暮康久

来週から待降節に入り、教会の暦（カレンダー）ではまた新しい一年が始まります。その暦の最後の週の主日、つまり今日、教会が「王であるキリスト」を讃えて、祝うことはとても素晴らしいことだと思います。何故なら、人類の歴史の終着点、つまり「終末の時」に、すべての人にとって、「王であるキリスト」が明らかになる、というのが私たちの信仰だからです。「王であるキリスト」を教会の暦の最後の主日に祝うことは、私たちの信仰の全体を指し示しているように思います。

今日の第一朗読と第二朗読で朗読された、『ダニエル書』と『ヨハネの黙示録』は、この「終末の時」と「王であるキリスト」との関係を描いています。今日はこの二つの朗読に注目して、私たちの信仰にとって、「終末の時」と「王であるキリスト」との関係がどんな意味を持ちうるのか、そのことをご一緒に味わってみたいと思います。

まず、今日の第一朗読と第二朗読を見てみたいと思います。第一朗読の『ダニエル書』には、こう記されています。『見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み、権威、威光、王権を受けた。…』

そして、第二朗読の『ヨハネの黙示録』には、『見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る』とあります。

「見よ、」という導入句や、「人の子が雲に乗ってくる」という表現において、今日の二つの朗読が、とても似ていることに気づきます。旧約聖書の中の『ダニエル書』は、BC165年頃に書かれたとされています。一方、新約聖書の中の『ヨハネの黙示録』は、AD100年頃に書かれたとされています。二つの文書の成立の間には300年近い時間の隔りがありますが、実は、この二つは、共に「黙示（文書）」と呼ばれる形式に分類される文書なのです。そして、旧約・新約を通じた聖書全体の中で、「黙示（文書）」と呼ばれる文書はただこの二つだけなのです。聖書全体の中で、『ダニエル書』と『ヨハネの黙示録』が特別な意味を持つ文書であることがこのことから何となく分かると思います。

つまり、今日の第一朗読と第二朗読は、聖書の中で特別な意味を持つ「黙示（文書）」から取られているということになります。「王であるキリスト」の祭日に、「黙示（文書）」が朗読されることの意味とは何なのでしょう？そのことを味わうために、「黙示（文書）」とはどんな文書なのかということについて、少し確認してみたいと思います。

「黙示（文書）」とは一体どんなものなのか？それをよく示しているのが『ヨハネの黙示録』の冒頭、1章1節です。ちょっと読んでみたいと思います。

『イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。』

ここで「黙示」と訳されている言葉 ἀποκάλυψις には、元々「(隠されているものの) 覆いを取り払って、真相〔秘儀であった内容〕を示す、現わす」という意味があります。「啓示」と訳されることもあ

ります。つまり、この1章1節が示しているのは、「黙示（文書）」とは「(隠されているものの) 覆いを取り払って、これから起こるはずのことを、神が知らせる」という性質のものであるということです。

そして、第一朗読の『ダニエル書』の中にも同じような表現を見つけることができます。例えば、「מָה דַּי לְהוֹאֵא ..... הוֹדַע (神が) 何が起こるかを知らせる」という表現や、「(神が) 「רָז 秘密 (隠されたもの) を אֵלָא 顕わにする」という表現が集中して登場します。

「隠されている、これから起こるはずのことを、神が知らせる」それを記した文書が、「黙示（文書）」だということになります。これはつまり、「これから起こるはずのことは、既に決定している」ということを意味しています。これが「黙示（文書）」において最も大切な点であると思います。言い換えれば、「黙示（文書）」とは決定論的な歴史観、終末観を示した文書だということです。これが聖書全体の中で、たった二つだけの「黙示（文書）」が持つ特別な意味ということになるでしょう。

そもそも旧約聖書の伝統においては、「預言者的な終末論」が本流です。預言者的な終末論というのは、この歴史の終末において、主が直接にすべての民の王となる「主の日」が来るという希望を語ります。しかし、既にそれが決定していることが前提である「黙示（文書）」のように、その詳細なプロセスを語ることはありません。ですから、決定論的・黙示的な要素を持つ『ダニエル書』が旧約聖書正典として認められる時に、預言書としてではなく、諸書として位置付けられたのです。

しかし、ある意味で、この特殊とも思える決定論的・黙示的な終末論を示す『ダニエル書』が旧約聖書正典として認められことは、私たちキリスト者の信仰にとって大きな意味がありました。それは、『ヨハネの黙示録』の「黙示」という形式と、「人の子の再臨」というメッセージが、『ダニエル書』によって、聖書の正統な伝統のうちに位置付けられたからです。

ここまで見てくると、今日の第一朗読と第二朗読に、二つの「黙示（文書）」が朗読されたことの意味が見えてくるような気がします。「人の子が雲に乗って来る」つまり「イエス・キリストの再臨」という決定的な出来事は必ず起こる。それは既に決定している。というメッセージです。それは、私たちキリスト者の信仰であり、神は私たちに「黙示（文書）」を通してそのことを知らせたということです。

「イエス・キリストの再臨」。世の知恵から見たら、荒唐無稽な神話やファンタジーにしか思われなかもしれないかもしれません。確かに、「黙示（文書）」は、詩的（ポエティック）な表現や、豊かなイメージを使って「終末の日」を語ります。ですから「黙示（文書）」の終末の描写をそのまま受け取ると、何だかハリウッド映画にあるような、漫画的な、破滅的な世界の終末をイメージしてしまうかもしれません。しかし、それらのハリウッド的・漫画的な破滅的終末の描写と、聖書の「黙示（文書）」が語る終末は根本的に違います。聖書の「黙示（文書）」が語る終末の中心は、徹底して、「イエス・キリストの再臨」は既に決定しているということに他ならないからです。逆に言えばそれ以外の豊かなイメージの描写は、この中心的なメッセージの外側の飾り程度の意味しかもっていないと言えるでしょう。大切なことは、「イエス・キリストの再臨」は既に決定しているというこの一点です。

それならば、「イエス・キリストの再臨」とは何を意味しているのでしょうか？『ダニエル書』には、『諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。』

と続いています。

そして、『ヨハネの黙示録』には、『すべての人の目が彼を仰ぎ見る、／ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。』」と続きます。

この箇所で言われているのは、「イエス・キリストの再臨」の 때가、人類全体にとっての決定的な時となるということ、すべての人にとって、「王であるキリスト」が明らかになるということです。つまり、それは、私たちが、愛そのものである神を王としていただくということ、喜びに満ちてその愛の支配のうちに安らぐということ、これが「王であるキリスト」の再臨の時にほかならないということです。そしてこの事は必ず起こると「黙示（文書）」は示すのです。

信仰のまなざしは、本気で「イエス・キリストの再臨」を見つめ続けます。『ヘブライ人への手紙』が言うように「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」だからです。

私たちは日常生活でも、出来事の推移を予測して「あ～、それは確実だね」と言ったりします。だとすれば、聖書が語る「イエス・キリストの再臨」は、私たちが経験するどんな現実よりも、「より確実な現実」だと言えるはずですが。しかし、この「より確実な現実」とは、私たちが、身の回りで、手に触れることができるような意味での「確実な現実」という意味ではありません。それは、「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する」信仰において見つめ続ける「より確実な現実」ということです。

それはいつでも私たちの先にあつて、私たちを照らし、励まし、導く、現実です。常に本質的に私たちの足元を照らす現実そのものだからです。ここに、キリスト教的終末論の意味があるのだと思います。その意味で、私たちの間を過ぎ去って過去のものとなってしまういくつもの現実よりも、「イエス・キリストの再臨」は、いつも私たちの先にあつて、私たちを照らし続ける「より確実な現実」だということなのです。

「イエス・キリストの再臨」による愛の完成の実現は、既に私たちに約束されたものです。必ず起こるはずのことを、神が私たちに示したからです。

しかし、この世界を見渡せば、そこには愛の不在と分裂に苦しみ喘ぐ私たちの姿があります。絶えることのない苦しみと悲しみ、それも世界の現実です。人類は未だ、愛の完成の実現である「イエス・キリストの再臨」の時に向かって歩き続けているということなのでしょう。その時がいつなのか、それは誰にも分かりません。しかし、それでも私たちは歩き続けていくことができるのです。私たち信仰者は、それが未だ成らざる出来事であるにも関わらず、本質的に既に私たちに与えられていることを信仰において確信しているからです。私たちの主、「王であるキリスト」はアルファであり、オメガであるからです。

喜びに満たされて、私たちの「王であるキリスト」を讃えましょう。そして「王であるキリスト」の再臨を心から待ち望みながら、共にこのごミサを捧げてまいりましょう。